

アルド・ロッシおよびテンデンツァ運動における建築理論と表象の研究

著者	片桐 悠自
学位授与年月日	2017-03-23
URL	http://doi.org/10.15083/00075677

審査の結果の要旨

氏名 片桐 悠自

本研究は、既往研究が過渡的段階にあるテンデンツァ運動を取り上げ、その主導者の一人であるアルド・ロッシを軸として、表象・建築理論とその実現の両面から、テンデンツァ運動に内在する動的特性を明らかにするものである。

本論文は3部からなる。第1部は第1章と補章からなる。第1章では、アルド・ロッシの1950年前後のドローイングを通時的に分析し、テンデンツァの建築に関連する表象理念が検証された。また、補章では、日本におけるドローイングを通じて、彼の日本の都市・宗教建築への関心が検証された。その結果、第1章では〈科学〉と〈宗教〉という二つのモチーフが複合してロッシの「類型」概念を規定していること、補章では、ロッシの〈宗教〉モチーフの内に、日本文化との接触を通じた神道や仏教の影響を見出している。以上の表象分析は、ロッシの建築理念を理解する有用な手がかりを与えると評価できる。

第2部は、第2章と第3章からなる。第2章では、テンデンツァ運動における「類型」概念を論じている。グラッシとロッシの「類型」概念が比較検討され、前者では「形態の自律性」に基づく配列構成の単純化が中心的理念であるのに対して、後者では前者を批判的に捉え、社会的・現実的な生産技術に基づくことを明らかにしている。

第3章では、「テンデンツァ」の語義を軸にメンバーの著述が検討され、その理念の国際的な影響関係を考察している。その結果、「テンデンツァ」が建築家の内面的な「様式への意志」と結びついたリアリズムを志向するものであると結論づけている。以上、第2部では、「テンデンツァ」がイメージを自律的に再生産可能な〈生命〉理念を背後に有するものであり、すなわち「傾向（テンデンツァ）」とは一方向に収束するものではなく、オルタナティブな動的变化を指すものと帰結している。それは、これまで不分明であった「テンデンツァ」の動的特性を明らかにした点で、近代建築理解に大きく寄与すると考えられる。

第3部は、第2部で明らかにされた建築理念が、建築設計においてどのように実現されたかを検証する試みである。現地調査を行うことで、観念的分析に陥ることなく、その建築理念の実現過程を具体的に検証している。

第3部は、第4章、第5章、第6章からなる。第4章はその実現検証の準備段階にあたり、アイモニーノとロッシが共有する〈貧しさ〉の概念を彼らの言説から詳細に検討している。その結果、しっくいの使用が生産技術に基づいた〈貧しい材料〉への志向を反映すると位置づけている。さらに〈貧しい建築〉に対応するしっくいの造形を検証し、同時代のアルテ・ポーヴェラとの造形的類似とヘルツォーク&ムーロンへの影響を明らかにした。

以上の整理を受けて、第5章では、アイモニーノの15作品を対象に建築における被覆材と色彩の展開過程を検証している。その結果、1950-60年にはアルヴァ・アアルトやルドヴィコ・クアローの影響により、石材が被覆材として使用されたのに対し、《ガララテーゼの集合住宅》以降に色しっくいの使用が始まり、70年代以降に三原色の使用が顕著になることが明らかにされた。第6章では、ロッシの21作品を対象に被覆材の展開過程が検証された。その結果、しっくいがロースの材料の簡素さの理念を受け継ぐものであること、都市に表出される〈皮〉として捉えられることを指摘した上で、1970年代以降になるとしっくいが他の材料と複合されることを示した。そこで明らかにされたのは、テンデンツァの建築理念を体現する、被覆材の動的な展開である。

結論では以上の成果を総括し、「テンデンツァ」が、中核的理念として〈建築の生命〉を有するものであり、具体的でリアルな建築実現につながるものであると結論付けている。

以上、本研究は、テンデンツァを主導したロッシの建築理念と実践の発見的検証を通じて、その特性を明らかにするだけではない。本研究が明らかにしたテンデンツァ運動に内在する〈生命〉という中核的理念は、近代建築とポスト近代建築間の溝を埋め、これまでのポスト近代建築理解に一石を投じるものであると評価できる。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。